

***** 研究エッセイ *****

『先住民族サミット』アイヌモシリ2008に参加して

愛知県立大学外国語学部教授

稲村哲也



1983年、野外民族博物館リトルワールドに建てられたチセ。中央が萱野茂氏、その右隣が江上波夫初代リトルワールド館長（どちらも故人）。写真提供：リトルワールド

昨年2008年7月8、9日に洞爺湖で「G8サミット」が開催されたが、その機に、7月1～4日の日程で、沙流郡平取町と札幌市で、アイヌの方々による「先住民族サミット」の国際会議が開催された。「先住民族サミット」に先立って、2007年9月には、国連で「世界の先住民族に関する権利宣言」が採択され、さらに、2008年6月に、日本の国会でも「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両議院で可決された。アイヌ民族に同化を強いた1899年施

行の「北海道旧土人保護法」が1997年に廃止され、「アイヌ文化振興法」、いわゆる「アイヌ新法」が成立したが、それ以来の画期的な法的地位の変化が起こったことになる。つまり、2008年になって初めて、アイヌが日本の先住民族であることが公式に認められたわけである。

私は、以前、野外民族博物館リトルワールドで研究員として勤務したが、そのときに、野外展示場にアイヌのコタンを復元建設する事業を担当した。事業の開始にあた

って、平取町二風谷でアイヌ資料館を開設し、アイヌ文化の継承に務めておられた萱野茂先生に、コタンの建設を請け負っていただくようお願いに伺った。1982年ことである。萱野茂先生は、アイヌとして初めての参議院議員になり、アイヌ文化振興法の成立に尽力された方である。



チセ完成を記念したカムイノミ。写真提供：リトルワールド

私は、1723年から25年までメキシコに留学して、南部のオアハカ州に滞在した。オアハカ州は、多くの先住民族が居住している地域であるが、私は留学の機会に、先住民族のサポテカ族の村に住み込んで、その社会を調査したり、グアテマラに行って、マヤ系のキチュ族の調査を行ったりしていた。その経験から、文化人類学研究者になる決心をし、大学院在籍中には、南米アンデスの先住民族ケチュア族のリヤマ・アルパカ牧畜民の調査をし、以後もずっと続けてきた。リトルワールドの仕事で、カナダやアメリカ合衆国の先住民族ギクサン（北西海岸）や、ホピやナバホなど南西部インディアンの保留地も訪問したことがある。「先住民族サミット」には、そうした北中米の先住民族の方々も参加することになっており、「会議」の内容と共に、アイヌと先住民族の方々の連帯の状況にも大いに関心があった。「先住民族サミット」には、一般に開かれていたため、アイヌの方々にとっては極めて重要な時期における重要なイベントであるこの「先住民族サミット」に、私もぜひ参加したかった。

26年ぶりの沙流郡平取町二風谷へ

「先住民族サミット」は最初の2日は平取町二風谷で開催され、後の2日は札幌で開かれることになっていた。平取町の民宿に電話したところすでに満室だったため、最寄のJR富川駅のシティホテルに宿をとった。前日に札幌に入り、当日7月1日の朝にJR富川に着いたが、そこから平取町への交通手段がなく半ば途方にくれていると、車で知人を出迎えに来ていたスタッフの本多正也さんに声をかけていただき、会場まで送っていただいた。平取町の訪問は、1982年以来で、26年ぶりとなった。

本多さんは、グループ“シサムをめざして”（シサムは「よき隣人」の意味）というアイヌ支援の市民団体で、「先住民族サミット」の開催・運営を支援しておられた。名古屋のご出身ということで親しくしていただき、期間中ずっとお世話になった。

平取町公民館に着くと、受付でアイヌの方々や著書やオリジナルTシャツを販売したりしており、なごやかな雰囲気があった。各国からの先住民族の方々が到着し、フロアーもアイヌの方々や和人の参



海外招聘先住民族の方々

加者で会場は満席となり、熱気を帯びた。
まもなく、酒井美直さん（首都圏のアイヌの若者のパフォーマンス・グループ AINU Robeles の代表）の司会と英語通訳で国際会議が始まった。まず、会場の前列に陣取る、海外先住民族招聘者、11 カ国、21 民族の方々が紹介された。

先住民族の価値観とライフスタイル

統括代表の萱野志朗さんをはじめ、共同代表のアイヌの方々や小野有五教授（北海道大学・地球環境科学研究所）の挨拶のあと、フィリピンのイゴロット族の先住民族運動家で、国連「先住民族問題に関する常設フォーラム」議長のヴィクトリア・タウリ・コープスさんの基調講演があった。「常設フォーラム」は、人権委員会の下での「専門家機構」と共に、国連の「世界の先住民族に関する権利宣言」を実行していく上で

責任を持ってアドバイスする立場にある。その議長であるコープスさんのスピーチは、さすがに切れのよい、説得力のあるものだった。「G8 サミットでは、急速な原油価格の高騰による世界経済混乱の立て直しや金融市場の安定化、環境問題・気候変動への対処、世界的な食糧危機、アフリカ問題、紛争解決と平和構築などが話し合われると思いますが、たいへん興味深いことに、そのような問題はすべてG8の国々が招いた問題です」という主張は、まったく的を得たものだった。さらに、G8への要求として、「森林保全による二酸化炭素の排出削減」について、熱帯の森林で生活している先住民族自身に情報を提供してしかり相談した上で決定すること、食料危機や環境保全のためにも先住民族のライフスタイルを尊重すること、先住民族の森、草原、海、沿岸といった先住民族が生活する場を尊重することが重要で、それは世界そのものを

救うためにもたいへん有効であること、などが述べられた。アンデス、ヒマラヤ、モンゴルなどの人々の環境への適応、環境利用と保全のシステムなどを研究対象とし、先住民族の叡知に学ぶことの重要性などを述べる私にとって、先住民族自らのそうした主張は、強い共感を呼ぶものだった。「先住民族サミット」の基調講演としてまさに相応しい内容だと感心させられた。

各海外招聘先住民族、グアテマラのマヤ・カクチケル、ハワイ先住民族、北米のヘメス・プエブロ、タオス・プエブロ、コマンチ、チェロキー、オーストラリア・アボリジニ、ニュージーランドのマオリ、ニカラグアのみスキート、ノルウェイのサーミ、フィリピンのカナカナイ、台湾のアミ、グアムのチャモロ、メキシコのナワ、カナダのモホークの方々スピーチが続いて行なわれた。それぞれの国や民族の実情や個人的体験、思想が語られ、たいへんに興味深かった。たとえば、グアテマラのマヤのロサリーナ・トゥユックさんは、「先住民族を絶滅させようとする政策がとられてきた。戦争や飢えに苦しめられ、女性は夫たちを亡くした」が、「自ら身につける民族衣装の織物にひとつひとつ意味があり、多くの伝統の知恵を守ってきた」と述べた。それぞれ話者の語り口はことなるが、自然は無限だと前提のもとに行なわれてきた乱開発、新自由主義的な経済政策に対抗した「母なる大地」という考え方が、多くのスピーチに通底していた。私が経験したいくつかの国際シンポジウムと異なるのは、壇上にならぶ発表者の間で、互いの理解と共感が非常に強く感じられることだった。そしてアイヌのフチ（おばあ

さん）の宇梶静江さんの苦難とドラマに満ちたライフヒストリーと、アイヌ同胞と先住民族としての、静かで力強い運動のメッセージも感動的だった。統括代表の萱野志朗さんのスピーチでは、アイヌの歴史、ご自身の曾祖父トッカラム氏の生涯、2006年に亡くなられたお父上の萱野茂氏の生涯について話された。私は、お父上によく似ている萱野志朗氏の語り口から、本当に包容力があって尊敬していた萱野茂氏の人柄を懐かしく思い出していた。



統括代表の萱野志朗氏

初日の会議が終了したとき、再びホテルへの交通手段がなかったが、事務局に相談すると、海外招聘先住民族の方々と同宿だということがわかり、移動のバスに同乗させていただいた。おかげで、バスでの往復やホテルの食事や休憩の時間に、中米や北米の先住民の方々とお話しすることもできた。

ウコチャランケ

翌7月2日の午前は、ウコチャランケと称した分科会が開かれた。「環境」「権利回

復「教育・言語」の3分科会が用意されていた。どれも興味深かったが、私は「萱野茂二風谷アイヌ資料館」で行なわれた「教育・言語」の分科会に出た。「アイヌ資料館」個人的には27年ぶりの再訪であり、懐かしかった。屋外にアイヌのチセ（家）が復元展示してある。萱野茂先生を訪ねたとき、チセに泊めて欲しいとお願いしたところ、チセにフトンを運んでくださり、泊めていただいた。

資料館の会場では、車座になって、海外招聘先住民族とアイヌの方々が発表者した。言語の継承、教育、自己のエスニック・アイデンティティなどをテーマとして話し合われた。言語教育に関しては、萱野志朗さんから「アイヌ語教室」の事例が紹介され、マオリやサーミにおける言語教育の実情も紹介された。日常的に使われることがほとんどなくなったアイヌ語に対して、サーミやマオリの場合は、先住民族の権利が相当に受け入れられ、テレビやラジオの放送があったり、公教育やカレッジでも教育が行なわれている。そうした状況には格段の開きがある。

分科会ではまた、かなり個人的な体験に踏み込んだ語りや、ユーカラの朗読、サーミの歌やマオリの方々によるパフォーマンスもあり、またユーモアたっぷりのスピーチもあり、たいへんに盛り上がった。一般参加者も、自然にその盛り上がりの輪に入れていただいた。

分科会は酒井美直さんの発表で始まったが、「帯広で育った子どもの時は、アイヌという言葉聞くのが嫌で、アイスという文字を見ただけで

も気分が悪くなったが、自分の文化に誇りをもっているカナダの先住民族と交流することで、すっかり自分が変わった。自分の視点さえ変われば世界が変わることに気づいた」と述べられた。彼女の兄弟の酒井厚司さんも、自らのアイデンティティの確立の過程について、時に言葉を詰まらせながら、率直に語った。若いアイヌの方の本音の言葉をうかがったのは始めてだったので、これもたいへん感動的だった。

その数ヶ月前に浜松市で開催された日系ブラジル人に関する国際シンポジウムに出席したとき、「小学生のときに来日して学校でいじめにあったが、それを克服して自己のアイデンティティを確立した」という柳瀬フラビアさんのスピーチが感動的だったが、日本におけるマイノリティの若い方々の苦難の実態と覚醒の過程に共通点があることに、大いに考えさせられた（実は、ICUの学生さんたちの通訳ボランティアの中に、その柳瀬フラビアさんがいることがわかり、驚いた）。やはり、「北海道旧土人保護法」に示された日本におけるマイノリティに対するマジョリティの差別的態度と



ウコチャランケで話すマオリ代表と酒井美直さん

同化政策、その後の海外での植民地政策、そして現在の定住外国人への差別意識。そこにははっきりとした連続性があり、現代の日本の社会での外国人への差別や排除、いやそれだけでなく、日本人同士であっても起こりがちな異分子や弱者に対するいじめや排除など、日本社会の憂慮すべき諸問題は、その原点が先住民族アイヌに対する和人の問題にあると言えるだろう。

ダム予定地見学ツアー

その日の午後は、平取ダム予定地への見学ツアーが組まれていた。小野先生がツアー・ガイドをつとめられた。途中で見られた二風谷ダムのダム湖では、「2003年の台風によってほとんどが埋まり、100年の寿命として計画されたが、完成後のわずか7年で洪水調整機能を失った」とのこと。途中で、アイヌ文化伝承者のフチ、木幡サチ子さんの家に寄り、そこから木幡さんがバスに乗りこんで、地域の自然環境や名前の由来などを解説してくださった。

平取ダムの建設予定地には、アイヌの聖地がある。その一部がダム建設によって破壊されることになり、カムイに謝る儀礼をしてもらったと、木幡さんが語った。「ダム建設には反対ではない」と木幡さんが述べたことから、海外の先住民族の方々の間で、「先住民族は自然破壊に強く反対すべきだ」という熱い議論となった。マオリの方々は、アイヌの聖地に向かってマオリ式の祈りを捧げた。木幡さんの息子さんは、フチも心の底では反対しているのだが、町の意

向などがあって本音が言えないのだと補足された。

二風谷ダムの建設では、アイヌが訴訟を起こして勝訴したが、ダム建設は粛々と進められ完成した。ダム建設によって地元が経済的には潤う面もある。アメとムチを使いわけると日本の開発行政の圧倒的な力の前では少数のアイヌはあまりにも無力であることが、海外の先住民族の方々にはなかなか理解できないだろう、という感じがした。ダムによって生活の場と糧を失うフィリピンの先住民族の体を張った反対闘争とは、おのずと異なるはずである。無駄で自然を破壊するダムの建設を止めるのは、日本社会全体が先住民族の価値観を学ぶということではなければ、できないことであろう。

先住民族の連帯とシサム（よき隣人）

その日の夕方は、アイヌの伝統料理などが用意されて、公民館の会場で盛大な懇親会が行なわれた。それぞれの招聘者が、民族自慢の歌やパフォーマンスを披露し、大いに盛り上がった。

翌日は、札幌市に会場を移して会議は続いたが、先住民族の参加者一同は、日に日に連帯感が強まっているのが、傍目にもはっきりと感じられた。3日目の夕の交流会では、盛り上がりはピークに達し、会場全体に自然に踊りの輪が広がった。

私のような一般参加者も、自然に輪の中に入れていただき、盛り上がりのお裾分けにあずかった。私も多少なり「シサム」に近づけたような気がした。

「先住民サミット」参加は、アイヌの方々や先住民族の方々と交流がたいへん楽しかったし、とくに若い方々の考え方や新たな活動、先住民族の方々の連帯とその意義を知る機会となり、たいへん勉強になった。また、「先住民族サミット」に参加したことで、先住民族の問題にしても、日系ブラジル人の問題にしても、研究者同士だけで議論することの限界と、現場で支援活動など



交流会で盛り上がる老若男女・多様な参加者



家族で音楽や踊りを披露する「アイヌアートプロジェクト」(代表結城幸司氏)の皆さん

を実践する方々と共に、当事者の方々と交流・相互理解に努めることの重要性を実感させられた。そこで、私が会長を務める中部人類学談話会のプログラムに、「ブラジル日系人社会問題とはー研究者、実践者、当事者、それぞれの立場から」(2008年9月)、及び「先住民族アイヌの現在」(2009年1月)を組み込み、多文化共生研究所と共催で実施した。前者では、柳瀬フラヴィアさん(「当事者の立場から: 個人的体験と日系ブラジル人としてのアイデンティティ」、NPO法人「トルシーダ」代表の伊東浄江さん(「不就学の子どもとブラジル人学校の子どもの対象としたNPO活動の実践から」)をお招きし、後者では、萱野志朗さん(「先住民族サミットの成果およびアイヌ民族の現状と今後」と「グループ“シサムをめざして”調整委員の本多正也さん(「先住民族サミットのサポーターとしてー市民活動家の視点から」)をお招きし、それぞれ発表していただいた。

本誌の冒頭に柳瀬さんの講演録を紹介したが、次頁から萱野さんの講演録を紹介したい。本多正也さんの講演録も掲載の予定だったが、校正の段階になってご病気になられたため、残念ながら、掲載は別の機会に譲らなければならなくなってしまった。